

野辺の民間信仰・路傍の神々Ⅶ

村越 信子

(平成 17 年 10 月 6 日受理)

Images of Popular Belief in the Open Field: Wayside Gods and Goddesses Ⅶ

MURAKOSHI, Nobuko

(Received on October 6, 2005)

キーワード：ビルトシュトック、カルヴェール、カルヴァリオ、コプリヤストゥルピス、カプルーチカ、カプレンカ、
路傍の十字架像

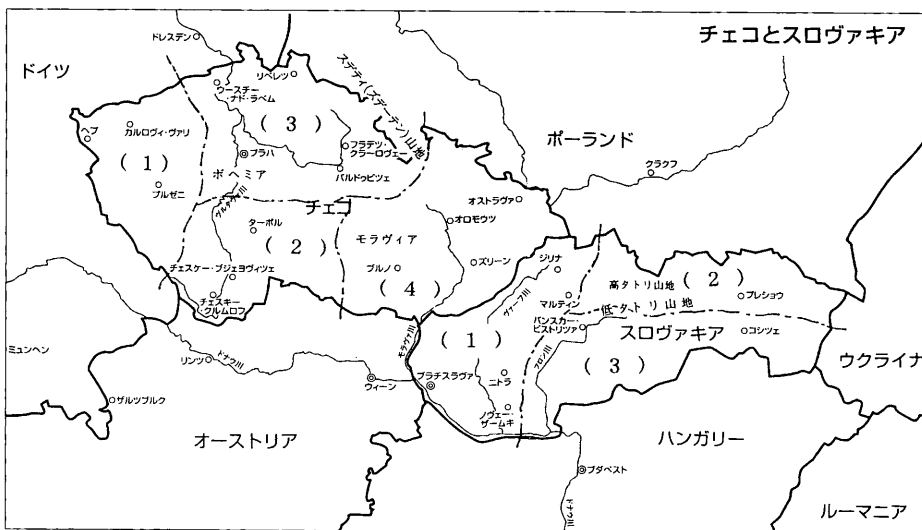
Key words : Bildstock, Carlvaire, Calvario, Kopliastulpis, Kaplicka, Kaplnka, Wayside cross,

1. はじめに

ヨーロッパ大陸の中央を流れる全長2,860kmのドナウ川は、アルプスの北部、ドイツの南西部の黒い森に発する。この大河は、ドイツのバイエルン盆地を東に流れ、ボヘミア山系にぶつかり、ドイツとオーストリアの国境の町パッサウで支流のイン川と合流する。パッサウをすぎるとボヘミア山系とアルプスの麓からウィーンを通り、スロヴァキアのプラチスラヴァでモラヴィア川と合流す

る。このモラヴィア川は、チェコのモラヴィア地方の中心であるブルノやオモロウツといった歴史的にも重要な都市を流れてくる川である。

さらにドナウ川は、スロヴァキアとハンガリー平原を流れ、スロヴェニアやクロアチアを流れてくるサヴァ川と合流し水量を増したり、カルパチア山脈を横切るところで一挙に川幅を狭めたりして、左岸にルーマニア、右岸にブルガリアを見ながら流れ、やがて黒海に流れ込む。このドナウ川流域の歴史は、諸民族の歴史であり、古代



(地図 1)

にはケルト人の世界があり、またローマ帝国の勢力圏であった。オーストリア史、ハプスブルグ帝国史、チェコ史、ハンガリー史などと積み上げられてきたところである。その歴史をたどるとき、さまざまな宗教によっても彩られている。

野辺の民間信仰・路傍の神々Ⅶとして焦点を当てたのは、ドナウ川流域の中程に位置するチェコ共和国とスロヴァキア共和国である。〔地図1〕

14世紀に神聖ローマ帝国の中心になったチェコ共和国は、その時代の街並が今もそのまま残っていて、千年の歴史が感じられる国である。1918年にチェコスロヴァキアが誕生したが、1993年1月1日を期してチェコスロヴァキアは再び解体し、チェコ共和国とスロヴァキア共和国として新たに歩みだした。両国は長い歴史を刻んできたその殆どの時代において、他国に侵略され続けた過去をもつ。しかしながらチェコもスロヴァキアもどんな小さな町や村にも、ゴシック様式の教会の尖塔が目止まる。曲線構造の上に玉ネギ型の屋根を載せたバロック様式の教会にも出会う。貴族の邸宅や市庁舎として使われているルネッサンス様式の優れた建築物など、それぞれの時代様式が現在の生活の中に見ることができる。

これらの建築物は、この地域が西欧のローマカトリック圏に属し、ドイツやオーストリア、イタリアなどと文化を共有してきたことを今に伝えている。現在のチェコ共和国はローマカトリック教徒39%、スロヴァキア共和国60.4%という数字であるが、路傍にたたずむ『カプリーチカ』『カプルンカ』の存在を確認し、さらにどのような意味をもって建立し、表現され、生活の中に生かされているのか期待がもてる。現在これらのドナウ川の流域の国々において、キリスト教に関してもさまざまな宗派が歴史を刻んでいるので、キリスト教伝播を念頭におき、旧街道を中心に実地踏査を行う。

2. チェコ路傍の神々『カプリーチカ』

チェコは、ヨーロッパ大陸のほぼ中央に位置する内陸の国で西部のボヘミア地方と東部のモラヴィア地方とからなっている。チェコの歴史、文化、経済の主流を担ってきたボヘミアでは、南北にヴルタヴァ川の悠々とした流れが貫いていて、その中心がプラハである。首都プラハ（Praha）をスタートし、（1）西ボヘミア地方から、（2）南ボヘミア地方、（3）中央ボヘミア地方、スロヴァキア寄りの（4）モラヴィア地方を廻り、国内（日本の

約1/5弱）をほぼ一周して実地踏査を行った。

ボヘミア地方とモラヴィア地方とに分けるのは、その名もボヘミア＝モラヴィア高地の存在である。その緩やかな高地を隔てたモラヴィアは、ドナウ川に注ぐモラヴィア川流域に広がっている。9世紀には現在のスロヴァキア、ボヘミア、ポーランド、ハンガリーにまでまたがる大モラヴィア王国があり、現在のモラヴィア地方はその中心地にあたるところである。

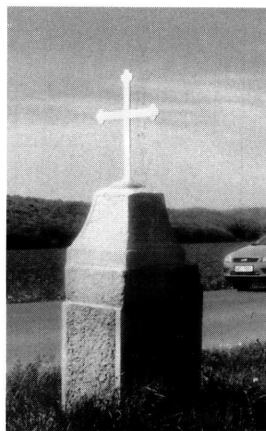
（1）中央ボヘミアから西ボヘミア地方

プラハの中心から自動車専用道を南下し、高速道路ルートE50に入り南西に20kmほど進む。NO10の出口で下り、カルルシュティン城を目標とし、田舎道を進む。今回の実踏での最初の“路傍の神々”との出会いは、三叉路に石の台座に小型の十字架（キリスト像なし）〔写真1〕を付けたものである。事前調査ではあまり期待できなかった中央ボヘミアの中心地域だが、次にはカラフルな祠型〔写真2〕、石造りの灯籠型、全体が石造りの十字架型など各種のものを確認。カルルシュティン城を通過し、ルートE50へと戻る道筋にも石造りの台座の十字架型、祠型などに出会う。

カルルシュティン城から南に約70kmのブルゼニュ（Plzen）からルートE49を南東へと進む。この沿道の十字架型は石の台座に鍛鉄製の十字架型のタイプが多く、キリスト像は金色や白に彩色されている〔写真3〕。セドリツェ（Sedlice）村の入口には、オーストリアのチロル州でよく見かけた石造りの灯籠型に出会う〔写真4〕。この村の中央広場には3mほどの巨大な十字架型〔写真5〕。警察署の建物には壁龕のマリア像〔写真6〕、さらに公園には彩色された聖人像などがあった。

（2）南ボヘミア地方

世界遺産に登録されている小さな村ホラショヴィツェ（Hlavošovice）を目指し脇道に入ると、大きな彩色された祠型が3基続き〔写真7〕、その先には巨大な祠型の前に灯籠型が立っている二つのタイプを組み合わせた珍しいタイプのものが現れた〔写真8〕。百年前の家並みがそのまま残るホラショヴィツェ村の中央広場には小型ながら立派な礼拝堂があり、その前に十字架型が1基設置されていた。この小さな村から田舎道をチェスケー・ブディエヨヴィツェ（České Budějovice）に向い、ここから北東へ転じルートE55を進む。この沿道の集落に鐘楼と思われる建物の横に並んで十字架型が立っている珍しいタイプのものに出会う。ペルフジモフ（Pelhřimov）



〔写真1〕



〔写真2〕



〔写真3〕



〔写真4〕



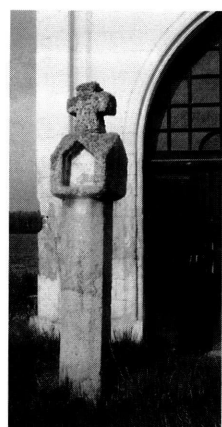
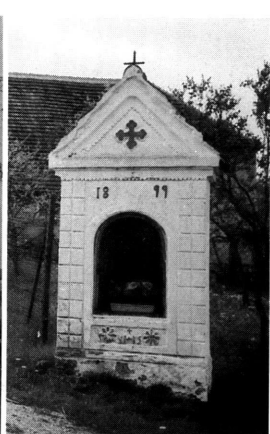
〔写真5〕



〔写真6〕



〔写真7〕



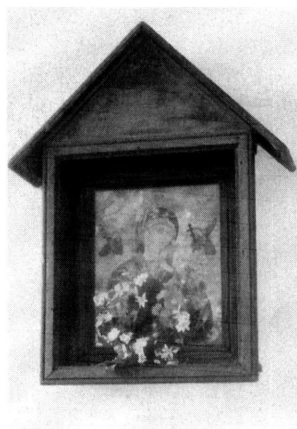
〔写真8〕



〔写真9〕



〔写真10〕



〔写真11〕



〔写真12〕



〔写真13〕



〔写真14〕



〔写真15〕



〔写真16〕



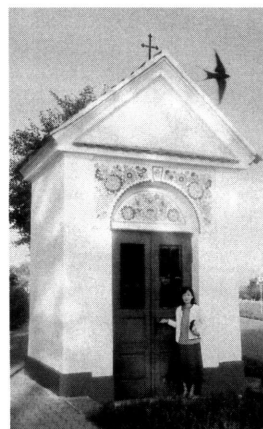
〔写真17〕



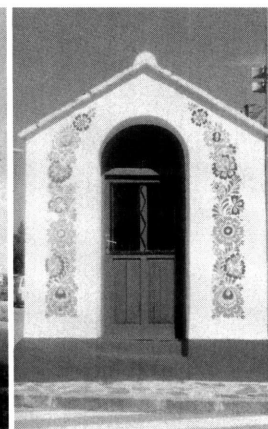
〔写真18〕



〔写真19〕



〔写真20〕

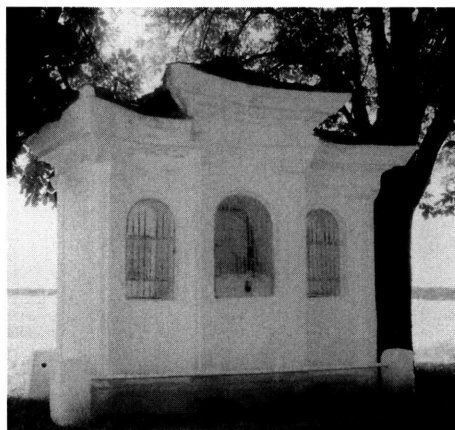




〔写真21〕



〔写真22〕



〔写真23〕

の街角には、壁龕に十字架型が2基設置され〔写真9〕、手を合わせる人の姿があった。この町から南下しルート112号の田舎道を進む。

（3）中央ボヘミア地方

モラヴィアを出て、首都プラハ方面へ移動。中央ボヘミアへ入り、小さな町リトミシュル（Litomyšl）までの沿道には「路傍の神々」の姿が途絶える。フラデツ・クラロヴェー（Hradec Králové）で道は西へと転じルートE67を進む。この沿道にも、ぱったりと「路傍の神々」の存在が途絶えた。できるだけ多くの脇道を踏査してみたが、やはりこの地域には「路傍の神々」は見当たらない。100kmほど進むとブジェロフ・ナド・ラベム（Přerov nad Labem）村である。この村には中央ボヘミアの木造建築を移築した野外博物館があるので、『カプルーチカ』の情報収集のため立ち寄る。かつての古い民家と共に、路傍の『カプルーチカ』が2基（灯籠型、壁龕タイプ）〔写真10, 11〕展示保存されていた。新しい町造りや道が造られたためか、野外博物館でしか路傍の神々には出会うことが出来なかった。

（4）モラヴィア地方

ルートE67沿いのザイチコフ村（Zajickov）に3mほどの祠型の上に鐘、下部に十字架がはめ込まれたタイプのものに出会う〔写真12〕。さらに進むと、ボヘミアで最も美しい町テルチ（Telč）に到着。1339年フラデツ（Hradec）家によって統治されこの時期に優雅なルネッサンス風の町に発展していった。テルチ城の庭園入口の塀際にこの城の一部を利用した小さな美術館があり、その入口を指し示すように立派なエンタシスの支柱をもつ灯籠型が立っている。四面に描かれている絵は保存の

ためカスガイで固定してある〔写真13〕。

テルチから東へルート23を20kmほど進むと、ルートE59（38）に交差する。これより北へ転じ、その沿道には、石造りの十字架型と灯籠型が並んでいる珍しいスタイルに出会う〔写真14〕。この辺りの十字架型はどれも堅牢な石造りである。高速道路を横断すると、道の表示はルート38の地方道となり道幅の狭い田舎道に入る。この辺りには十字架型が集落ごとに現れる。

しばらく進んで、巡礼聖地として名高いゼレナー・ホラ（Zelená Hora）へ向うルート150に合流。この沿道には、十字架型、灯籠型など何れも石造りの立派なものが多い。さすがに世界遺産に登録されている巡礼聖地への道筋である。しばらく南下して高速道路E65へ入り、ブルノ（Brno）を迂回し、ルートE462に転じ北東へオロモウツ（Olomouc）を目指し前進。オロモウツの町を迂回して東へと進んで、ロジュノフの野外博物館方面への一般道ルート442に入る。ほぼ真東に約70km進むとロジュノフ・ポド・ラドホシュテム（Rožnov pod Radhoštěm）の村である。町はずれの公園内に「Přerov nad Labem」野外民家博物館があり、カプルーチカの情報や参考資料収集のため入館する。構内に移築してある立派な木造の民家の前に、家を守るように巨大な木製の十字架型が立っていた〔写真15〕。十字架にアーチ型の屋根のある南ドイツで良く見かけるタイプである。ブルノからルート480を南東に進む。大きなカーブに大型の祠型〔写真16〕、二段になっているが上部の壁龕には何もなく、下部にはマリア像が安置されていた。ブルノのローカル空港との分岐に、堅牢な石の台座に石製の十字架型。このキリスト像は十字架の大きさに対し、非常

に小さく見かけないバランスである。この沿道には、同ようなタイプの石製の十字架型が続く。何れも色鮮やかな花々が手向けられていた。またフランスの中央部で見かけられた、繊細な細工の鍛造製の十字架に、銀色や金色に彩色されたキリスト像の十字架型〔写真17〕も点在している。モウトニーツェ（Moutnice）の入口には大きな祠型の前に十字架型が立っている珍しいスタイルのものがあった〔写真18〕。このルート55のどの集落にも、必ず出入口か集落の中央にカプルーチカを認めることができた。テレジン（Terezin）村の中央にマリア像、キリスト像が各々の祠に祀られて向き合っているペアの祠型があった〔写真19〕。

ホドニーン（Hodnín）で真東に転じ、ルート55に入る。交通量の非常に多い幹線道路を20kmほどで野外博物館のあるストラージュニツェ（Strážnice）である。ブルノから約80kmの沿道に20基以上のカプルーチカが点在していた。ストラージュニツェの街中には、大型の祠型の外壁にカラフルな植物をモチーフにした装飾が施されているものを2基確認〔写真20〕。この装飾は民家の窓辺や入口にも見かけられた。また、野外博物館内の集落の入口にも四面に聖人像の描かれた灯籠型〔写真21〕や素朴なタイプの聖人を祀った木製のカプルーチカに出会うことができた。

ストラージュニツェからルート55を北東へと進む。ヴェズリー（Veselí）の村の中央の三叉路に鮮やかなオレンジ色の縁取りのある二階建ての巨大な祠型（教会型）〔写真22〕、その正面の奥には白亜の巨大な祠型。この集落の先から右折してルート54を東へと進む。畑の中を真っ直ぐな並木が続く、その巨木の間に過去の実績では見ることがない三つの壁龕をもつ巨大な（幅約5m、高さ約3m）祠型〔写真23〕が鎮座していた。この道を30kmほど進むとスロヴァキアとの国境である。

3. スロヴァキアの路傍の神々『カプレンカ』

1993年にチェコと分離・独立した北海道の3/5ほどの面積の小さな内陸のスロヴァキア共和国である。国土のほとんどが山岳地帯であり、北部はポーランド国境にまたがるカルパチア山脈から連なるタトラ山地が横たわっている雄大な自然に恵まれた国である。

今回の路傍の神々の実地踏査にあたり、どのように区分して取り纏めるかがまず課題となった。地勢、行政区分、歴史上の区分など検討したが、実踏した道路状況か

ら便宜上三つの地域に分け整理した。首都ブラチスラヴァを含む地域を頭に、東側に尻尾を流して泳いでいる“オタマジャクシ”形をしている。頭部を（1）、尻尾の部分を東西に二分して、上部を（2）、下部を（3）とした。

（1）カルパチア盆地周辺……チェコやスロヴァキアとの国境を走っているカルパチア山脈からの谷々が連なる北東部から首都ブラチスラヴァ（Bratislava）を中心としたスロヴァキアでも幾分平坦な地域。

（2）タトリ山系周辺……スロヴァキアの誇るポーランドとの国境にまたがるタトリ山系が続く山地から、東部のバルデヨフを中心とした木造教会が点在している地域。

（3）南部の丘陵地帯……南側ドナウ川沿いのハンガリー国境沿い地域一帯とした。

実踏範囲は、ほぼ2,000kmにおよんだ。

（1）カルパチア盆地

チェコ国境からトレンチーンに至る20kmほどのルートE50沿いで、チェコで確認している石の堅牢な台座に石製の十字架に金色に彩色されたキリスト像の十字架型が立っていた。これがスロヴァキア第1号のカプレンカ（Kaplnka）との出会いである。

ヴァーフ川に沿ってルートE50（E75）を北東へと進む。トレンチーンの出口には、マリア像を線で表現したドーム型の斬新なデザインの祠型が真っ赤な花々に囲まれていた。イラヴァ（Ilava）の集落の入口に黒い十字架にシルバーのキリスト像のカプレンカにはローソクが灯され、花も供えられていた。また町中の道路沿いにねぎ坊主をつけた巨大な祠型（教会型）〔写真24〕。その先のコシェツァ（Košeč）の集落の入口には、モザイク風の円柱、立派な鍛造のフェンス、色の鮮やかな巨大祠型（教会型）〔写真25〕が立っていた。街中のバス停の一角には、二階に鐘楼のある巨大な祠型（教会型）〔写真26〕など目を見張るばかりである。

スヴェレペツ（Sverepec）村の入口には十字架型〔写真27〕が設置されていた。その村の先で、ルート517の田舎道を南へ進む。交通量も少ないのどかな丘陵地帯を行く。ドマニージャ（Domaniža）の三叉路には大きな木製の黒い十字架に白いアーチ状の屋根のある十字架型が立ち、道は北へと転じる。こんな山道を迂回するのも、山奥の寒村チチマニ（Čičmany）の独特な装飾模様を施した家並みを見学するためのルートである。ルート64との分岐、ライエツ（Rajec）村の中央、大木の間に時計台風の屋根の大型の祠型（教会型）〔写真28〕があり、内部

にベンチが設置されていた。この界限には教会型にすべきか祠型に入れるべきか決めかねるものや、高さ3～4mほどもある大型の十字架型が随所に見られた。

チチマニ村は、標高800mの山中にあり、200戸ほどの集落である。13世紀頃から人々が住みついていたという村だが、フス戦争以降の宗教的弾圧がこの山奥へ多くの人々を追いやった。第二次世界大戦の末期にも、ナチと激しい戦闘をくりひろげたという様々な歴史をもつが、現在では村民の20%ほどがプロテスタントの村である。チチマニ村を有名にした民家の壁面模様の伝統的ルーツは民俗学的にも明らかにされていないが、宗教との関連は見当たらない。

チチマニ村の入口には、アーチ型の屋根をもつ十字架型に花輪が飾られていた。あまり大きくはないが二面にガラス窓のある壁龕タイプ〔写真29〕、民家の壁面にはマリア像が祀られており〔写真29〕期待通り5基の路傍の神々に出会うことができた。装飾模様の十字架も2基見受けられた〔写真30〕。

チチマニ村を後にルート64まで戻り南下する。地図に道路番号も記されていないほどの田舎道との分岐となる、クリャチノ（Kl'ačno）村の入口に木製の十字架型が立っていた。この山道には集落が少ないので、三叉路に背の高い三角屋根付きの十字架型〔写真31〕が1基あっただけであった。ルート65に合流するスロヴァニ（Slovany）村の入口には、高さが3mほどはあろうという大型の祠型があった。この道を北上すると都会のマルティン（Martin）である。この町の入口手前を東に入った森の中に野外博物館がある。ここは沢山の民家や農家を移築し保存している。野外博物館の構内には2基の祠型〔写真32〕、東屋風で四面が壁や扉でなく腰ぐらいの高さの垣根のような囲みで、中央に聖人像が安置されている珍しいタイプ〔写真33〕のものが設置されていた。

マルティンより別の道に戻るかたちで、ルート65を経てルート519の山道を南下。モシュコヴェツ（Moškovec）村の入口にはシルバーのキリスト像の十字架型。さらに進み川沿いの小高い丘には幅の広い祠型〔写真34〕。このルート519のどの村にも背の高い十字架型があった。ニトリヤンスケ・ブラヴノ（Nitrianske Pravno）村でルート64に合流して、小川の橋の袂に3面ガラス張りで聖人像を祀った祠型〔写真35〕。この道沿いには祠型が目立つ。ルート50に合流して真西へと進む。祠型の上に鐘楼を取り付けたようなタイプ〔写真36〕のものが見ら

れた。その先にはドーム型屋根の十字架型、低い金属製の垣根に囲まれた前面がガラス張りの祠型と続く。ルート574との分岐の三叉路には十字架型が立っていた。その先の脇道との分岐には、一段高い石垣の上にクリーム色の壁面の教会型が立っていた。バーノフツェ（Bánovce）集落の入口の四ツ辻に白亜の祠型。集落の出口には現代的なデザインのアーチ状の祠型〔写真37〕。道路の両側には、広々とした草原状の大地が何処までも続く。この幹線道路のルート50（E572）の分岐や小さな集落の入口には、十字架型や祠型が点在していた。

トレンチーンの郊外でブラチスラヴァ方面を目指すE57に入って南下。30kmほど高速道路を使用してセネツ（Senec）で一般道（E571）に出て、ブラチスラヴァを目指す。ブラチスラヴァの都会の入口ともいえる郊外の分岐には、背の高い台座に真っ白な十字架型を確認する。

（2）タトリ山系周辺

マルティンより北東にルート18（E50）を進む。ヴォー川沿いの道とあって朝霧がわきあがり視界を妨げる。そんな霧の中にブリキの板にキリスト像を描き十字架に取り付けた簡素な十字架型〔写真38〕が現れる。タトリ山地の中心部への道を逆にとり、次は世界遺産の村ヴルコリネツ（Vlkolínec）である。ルジョンベロク（Ružomberok）からルート59（E77）を南下して約5km先を右折、山道へと入る。標高980mのヴルコリネツ村も朝霧の中にたたずみ、早朝とあって急斜面の駐車場には一台の車もない。

1770年に造られた木造の鐘楼。1875年に建てられた木造の聖堂もあったが、村内には路傍の神々は確認できなかった。ルート59に戻り堅牢な石の台座のある十字架型を発見。この道をルジョンベロクに戻り、さらに北上。ポツザーモク（Podzámok）で湖へ向うルート521との分岐となっており、この辺りはヴルコリネツの入母屋造りそっくりの家並みが続く。だが年代が新しいだけに仕上げが美しく立派である。さらにルート59（E77）を北東へと進む。この道はポーランドへと続く幹線道路である。ホルナー・レホタ（horná Lehota）村の大型の祠型に祀られたマリア像は、ふっくらとした顔立ちで、田舎の村娘を彷彿とさせるものである。また、ドーム型のトタン屋根の灯籠型〔写真39〕とも見える聖人を祀った珍しいタイプのカブルンカが立っていた。村の出口にも巨大な十字架型が鎮座していた。クリヴァー（Krivá）村の出口の祠型にはピエタのフレスコ画が色彩鮮やかに

描かれていた。その先では十字架型3基、ガラス張りの灯籠型〔写真40〕には、白亜のマリア像が祀られていた。

ポーランドとの国境から南東へ下ってくるルート67へと移動。山道を回り込むと、三角屋根の十字架に小さなシルバーのキリスト像の十字架型、大型の祠型〔写真41〕と続く。この祠型の扉の上の壁龕にはマリア像、内部にアンナ像を正面に、左にキリスト像、右手に冠をつけたマリア像、両側にベンチが置かれた広い空間を持つ内部である。

ルート537に入るとヴィソケー・タトリの山並が迫ってくる。ルート537沿いの森林も、谷筋に入ると暴風被害が痛々しいばかりである。この山岳道路沿いにはカプレンカの姿が途絶える。生活の場たる集落がなく、スキーや登山の施設のみのためだろうか。

ルート67に戻り東へと進む。刈り取られた麦畑の沿道に背の高い古びた祠型〔写真42〕。中には珍しいことにシルバーの磔刑像が祀られていた。スピシュスカー・ヴェラー（Spišská Belá）でルート77に合流、北東へと転じる。この集落の出口には白亜のコンクリート製の十字架型が晴れ上がった青空にくっきりと立っていた。丘陵地帯のカーブの多い道を快適に走る。小川の橋の袂には珍しく大きな巣箱型〔写真43〕が現れた。だが四面とも聖人像などの絵は剥脱していた。

ニジュネー・ルジュバヒ（Nižné Ružbachy）村の出口の小高い斜面に、ネギ坊主のついたクリーム系の大きな祠型（教会型）が。その内部にはベンチが設置されていた。しばらく登ったフォルバシ（Forbasy）村には鐘楼のある大型の祠型（教会型）がありこの内部にもベンチが設置されていた。

スタラー・ルボフナ（Stará L'bovňa）の三叉路を南東へルート68を500mほど進み左折、しばらく森の中を進むとルボフニアンスカ（L'ubovnianske）の野外博物館がある。オフィス棟の先には、見事な木造教会が建っていて、祭壇には華麗なイコン画で壁面を埋め尽くし、天井にも装飾がなされ外観からは創造出来ないほど豪華な内部装飾である。

野外博物館の構内には、大型の聖人を祀った祠型、アーチ型の屋根付きの十字架型などが設置されていた。

ルート68に戻りポプラド川沿いの道を南東へと進む。2kmほど先の三叉路には、ネギ坊主付きの二階建ての祠型。プラフニカ（Plavnica）の出口には大きな祠型。とこの地域には大型の祠型が目立つ。その先のカーブの小

高い丘の上には東屋風に四面が開かれた中に、白亜のマリア像が祀られていた〔写真44〕。このルートは、ポーランドとの国境線に平行して走っている道である。道はバルデヨフ方面へと行くルート77に合流。しばらく十字架型が続き、屋根のない石製のもの、ブリキのアーチ型の屋根付きのもの〔写真45〕、十字架の頭や左右の先端部分に飾りがあるもの〔写真46〕などバラエティーに富んでいて、40kmほどの間に17基も点在していた。

バルデヨフからルート77は真北へと方向を転じる。バルデヨフ郊外の温泉保養地への分岐には、4本の円柱の東屋風の堅牢な石製の祠の中に、さらに祠型を納めた珍しいタイプ〔写真47〕のものを発見。ズボロフ（Zborov）の分岐には、マリア像を祀ったガラス張りの祠型。その先の大木の間には、がっしりとした石製の十字架型。イエドリンカ（Jedlinka）村の木造教会を訪ねる分岐を入ると、ここにも十字架型、さらに木造教会の手前の十字路にも十字架型と沢山のカプレンカが点在している。

ポーランドとの国境に近い、この丘陵地帯には沢山の木造教会が点在し、それらを訪ねる沿道には、各種のカプレンカが点在していた〔写真48〕。ちなみにイエドリンカ村からルート73（E371）と合流するスヴィドニーク（Svidník）村までの20kmほどの区間に6基の十字架型を確認。

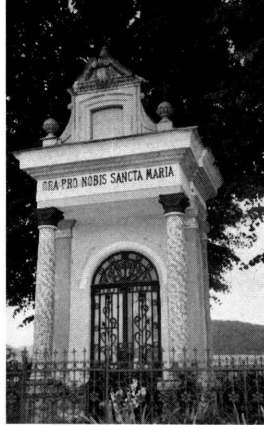
スヴィドニークからポーランド国境まで20km足らずである。その間の左右の枝道に入ると、古びているが良く手入れのされた木造教会が、村の墓地の一角に建っている。それらへの道の随所に十字架型が道案内をするように立っていた。

ルート73の幹線道路を真南に下ると、スロヴァキア第3の都市・プレショフ（Prešov）へと通じる。この沿道のどの集落にも十字架型が立っている。幹線道路から12～3kmもあるコジャニ（Kožany）の木造教会を訪ねるために枝道に入る。最初の集落シャピネツ（Sapiec）の出口には、今までこの地域には見られなかった祠型が、さらに未舗装のエクボ道を用意しながら進むと、峠の上にまた祠型〔写真49〕が鎮座していた。行き交う車などない丘陵地帯である。目的の村にはバス停の前の小高い斜面に、良く手入れの行き届いた、生活の中心となっているらしい木造教会が建っている。バス停の時刻表には、朝、晩の2便が記されていた。

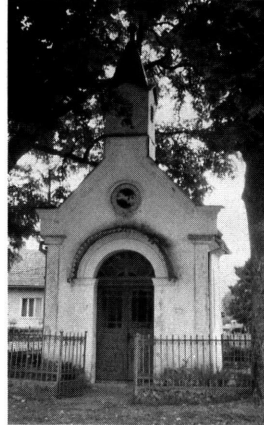
幹線道路（ルート73）に戻り南下する。ギラルトフツェ（Giraltovce）村の出口の十字架型は石製の見事な造り



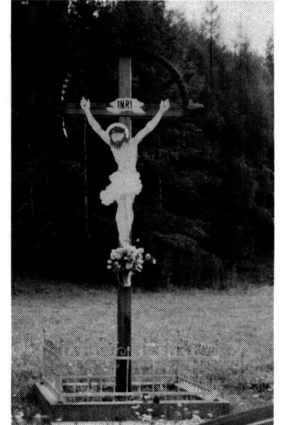
〔写真24〕



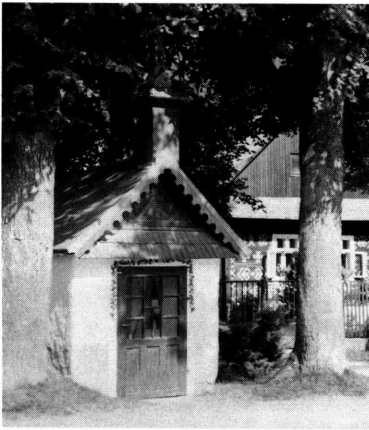
〔写真25〕



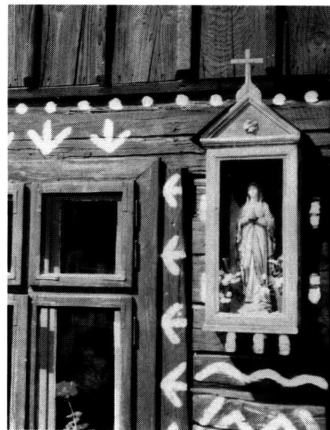
〔写真26〕



〔写真27〕



〔写真28〕



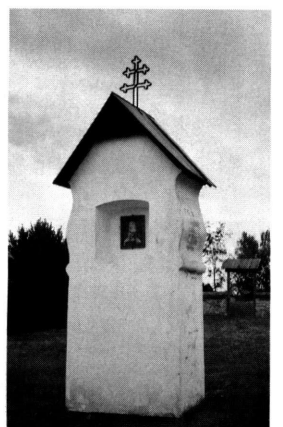
〔写真29〕



〔写真30〕



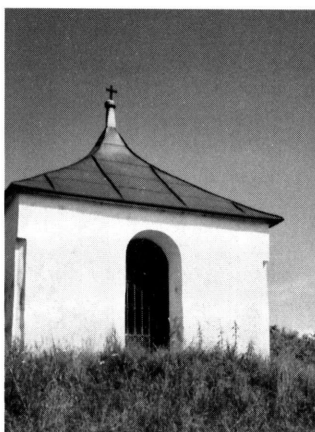
〔写真31〕



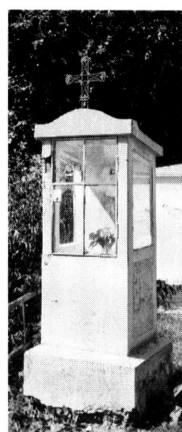
〔写真32〕



〔写真33〕



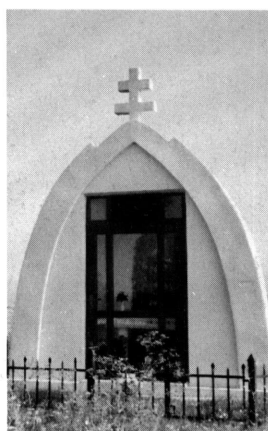
〔写真34〕



〔写真35〕



〔写真36〕



〔写真37〕



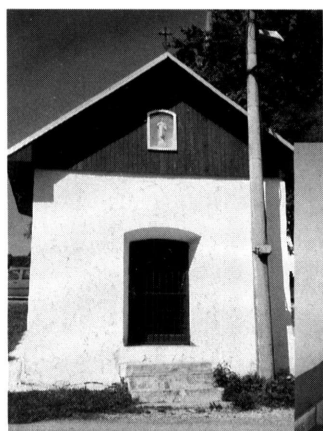
〔写真38〕



〔写真39〕



〔写真40〕



(建物)



〔写真41〕

(内部)



〔写真42〕



〔写真43〕



〔写真44〕



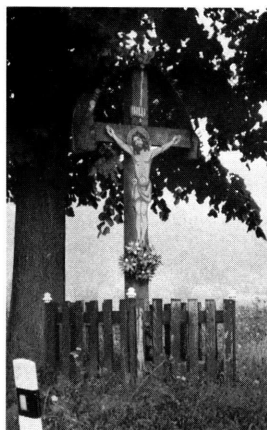
〔写真45〕



〔写真46〕



〔写真47〕



〔写真48〕



〔写真49〕



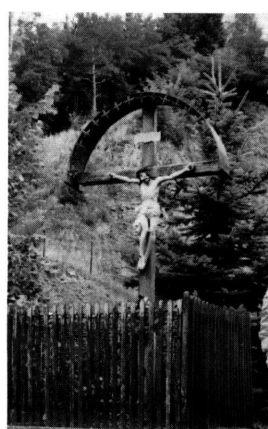
〔写真50〕



〔写真51〕



〔写真52〕



〔写真53〕



〔写真54〕



〔写真55〕

であった。プレショフの郊外で、レヴォチャ (Levoča) 方面へと向う幹線道路ルート18 (E50) に合流し、真西へと転じイタリアのトスカナ地方を彷彿とさせる雄大な丘陵地帯を進む。このルート18の沿道には、十字架型と祠型がセットで立っているものが目立った。また祠型の屋根に大型の十字架〔写真50〕がついているものなどもあった。

小高い丘の上にスピシュスケー城 (Spišský hrad) を眺めながら、丘の麓の城下町スピシュスカー・カピトゥラ (Spišská kapitula) に入る。

この町の出口には、巨大な祠型 (教会型) と十字架型が立っていた。このルートの各集落の出入口どちらかに、十字架型や祠型が設置されていた。

スロヴァキアの北東部に位置する小さな町レヴォチャ (Levoča) は今も城壁に囲まれている。スピシュスキー・シトヴルトク (Spišský štvrtek) でルート536に入って南東へと進む。スミジャニ (Smižany) の街中に十字架型、町の出口には巨大な祠型 (教会型) と十字架型が立っていた。オドリーン (Odorin) 村の小高い丘には祠型、その先の峠には十字架型。ヤムニーク (Jamník) の入口には、ドーム型の大きな屋根付きの十字架型と祠型と次々に現れる。ルート547との分岐のあるスピシュスケー・ヴラヒ (Spišské Vlasy) の入口には、大木に囲まれた祠型。その街中には鉄製のフェンスに囲まれた聖人像を祀った祠型〔写真51〕。ルート546との分岐のマルゲツァニ (Margecany) 村も出口の森の中には、屋根の大きな祠型、その一段上に十字架型など、この田舎道には沢山のカプレンカが点在していた。この道は、スロヴァキアの第2の都市コシツェ (Kosice) へと通じ

る。

(3) 南部の丘陵地帯

コシツェからルート50 (E571) の幹線道路を南西へと進む。町の出口にはガッシリとした石製の十字架型。チェチェヨフツェ (Čečejevce) の入口の小高い木立の中に十字架型〔写真52〕。幾分枯れかけた向日葵畑の彼方に、廃墟を頂いた円錐形の小山が目止まる。この辺りには祠型はなく、集落ごとに十字架型が見受けられる。リーボヴニーク (Lipovník) から脇道に入って、世界遺産に登録されているスロヴァキア・カルストの洞窟群がはじまり、ハンガリーまで数十キロ続いている。この村では十字架型を2基確認。本道に戻り、ロジュニャヴァ (Rožňava) 町を迂回して、さらに南西へと進む。トルナリャ (Tornal'a) という町には高層ビル群が聳える、今までの旅では見かけない風景に違和感を感じる。この辺りからカプレンカの姿はパツリと途絶えた。ズヴォレン (Zvolen) までの約110kmの間に4基の十字架型を確認できたのである。ズヴォレンからしばらくルート50を進み、フロンスカー・ドゥブラヴァ (Hronská Dúbrava) でルート525を南へと転じる。15世紀半ばには、ハンガリー王国の最も重要な鉱山都市であったバンズカー・シュティアヴニツァ (Banská štiavnica) へと通じる道である。カーブの多い山道に点在する集落にはたった2基の祠型があっただけである。分岐より20kmほどで15～18世紀に栄えた鉱山町に到着。町の入口、街角、鉱山跡地の野外博物館には、十字架型〔写真53〕のカプレンカが計4基、町中の壁龕にマリア像が2基確認できた。鉱山町を後に、ルート525を南下する。スヴェティ・アントン (Svätý Anton) 村には巨大な祠型。しばらく下った道端には、大きな屋根付きの十字架型、プレンチョフ (Prenčov) 村にも十字架型、ハンガリーへと通じる幹線道路ルート66 (E77) との合流地点にも金色に着色された十字架型と続いた。このルート66はなだらかな起伏の緑濃い草原 (畑) を国境に向かって南下している。国境までの約30kmの間には、祠型2基〔写真54〕、十字架型〔写真55〕2基を確認できたのであった。

4. 「カプルーチカ」「カプレンカ」のまとめ

事前調査や情報収集がしにくかったため、地図上での推測によって実地踏査を開始したが、チェコ共和国とスロヴァキア共和国を合わせ370基という満足すべき数の取材ができた。それらはどのタイプよりも大型であり、

記念碑的要素が他の国々に比べて強く感じられた。

中央ヨーロッパの主な宗教は、カトリック、プロテスタント、正教そしてイスラムの4つである。カトリックが支配的な国々は、ポーランド、チェコ、スロヴァキア、ハンガリー、スロヴェニア、クロアチアであるが、実踏対象のチェコはカトリックだけではなく、プロテスタントや無信仰者も約40%という高い比率を占めている。そしてスロヴァキアはカトリックに次いでプロテスタント、正教の信者も約30%強という現状である。とはいっても、とくにキリスト教が根強く生きてきた理由は、諸民族の民族意識の強さに起因すると思われるし、社会制度が変わっても、日常生活においては、昔のままの生活リズムが脈打ち、そこには基本的にキリスト教の暦が四季の節目を刻んでいることが感じられる。

これらの「路傍の神々」を従来より、仮称(1)十字架型、(2)祠型・教会型、(3)灯籠型、(4)巣箱型などに便宜的に分類してきた。

(1) 十字架型(仮称)

材質は石製のものと木製の2種がある。

(a)石製…どれも背が高く、しっかりした台座があり、台座には設置目的などが記されたプレート付きのものが割合に多い。

一例として、ヴィソケー・タトリのリゾート地シュトゥルプスケー・プレソに立っていた十字架型のプレートには『神のご加護により、この土地は旧所有者である我々の手に戻った』と明記されていた。

(b)木製…ドイツやオーストリアで良く見かける屋根付きが主である。金や銀色に彩色されたキリスト像が取り付けられている。屋根もアーチ型と三角型とがある。

(2) 祠型(仮称)・教会型(仮称)

十字架型に続き二番目に多かったのはこの祠型と整理したものである。一軒家が納屋かと思うほど大きな建物が集落の中心や峠などに鎮座していた。スロヴァキアには、祠型(教会型)と明記したものが多いが、外観は祠型だが建物の内部は教会型とすべき礼拝堂の条件がそろっているの、あえて祠型・教会型とした。

(3) 灯籠型(仮称)

確認できたのはチェコで4基、スロヴァキアで1基と少ないタイプで時代も古いものである。

(4) 巣箱型(仮称)

巣箱型に該当するものには出会わなかった。しかし外観は背の高い祠型だが、巣箱型の特徴である四面が壁龕

状になっていて、神々が描かれているものもあり、祠型ではあるが巣箱型の条件をもったものであった。

(5) その他

壁龕のマリア像など4つの型に該当しないタイプ。建物の壁に取り付けられてあるものが一般的だが、祠型の上部の壁面に小さいながらマリア像が祀られていた。

5. 結 び

2003年、偶然の人との出会いで前ローマ法王の祖国ポーランドには「路傍の神々」が数多く点在していることを知る機会を得た。その名称も『カプチカ』という言葉である。それを機に、東京家政大学研究紀要45集「野辺の民間信仰・路傍の神々Ⅶ」のリトアニアに続く実踏地域は、ポーランドを始めとする中央ヨーロッパに焦点をあてていく方向性をみだした。そしてキリスト教が深く根づいている国々だからである。今回はチェコ共和国、そして最近まで一つの国であったスロヴァキア共和国を選んだ。

しかし両国とも複雑な歴史があり、政治・文化・宗教などの把握はなかなか困難で情報の収集もしにくい地域で十分理解できない部分が残った。

路傍の神々の現地での名称について、チェコでは『カプルーチカ』、スロヴァキアにおいては『カブルンカ』である。特に磔刑像についてはチェコ語では『ボジー・ムカ』と呼び、これに該当するスロヴァキア語は『ボジェ・ムキ』があるが、一般的には、この言葉は使わないとのことなので、ここでは『カプルーチカ、カブルンカ』で統一した。

スロヴァキアのタトラ山地は期待に反してカブルンカは存在しなかった。ヨーロッパ・アルプスの山麓や峠道に点在し、山の安全を祈願し自然の厳しさを畏れ敬っていたのとは異なっていた。

山を降りた里にはカブルンカが存在し、集落の出入口や人が多く集まる集落の中央などに設置され、そこには必ず花が供えられていて祈っている姿にも出会った。人々の生活に結びついていることが感じられた。

ポーランドとの国境付近には、他の地域とは異なりマリア像やアンナ像が多く見られるようになり、マリア信仰の篤い地域に入ってきたことを実感する。

引き続き、路傍の神々を求めるきっかけとなったポーランド、ハンガリー、ルーマニア、と中央ヨーロッパ地域を各国の特徴を求めるべく実地踏査したいと考えている。

(株) 有斐閣

参考文献

謝 辞

- 1) 薩摩秀登(編著)「チェコとスロヴァキアを知るための56章」2003 明石書店
- 2) 南塚信吾(編)「ドナウ・ヨーロッパ史」1999 山川出版社
- 3) フローラ・ルイス「ヨーロッパ 下巻 民族のモザイク」1990 河出書房新社
- 4) 石川晃弘「東ヨーロッパ 人と文化と社会」1992

スロヴァキアの情報を提供下さいましたスロヴァキア共和国大使館の職員各位, チェコ語, スロヴァキア語のご指導を賜ったチェコ文化研究家で医師の関根日出男氏, 言語に関するご指導を賜った東京家政大学名誉教授横尾信男氏に感謝申し上げます.

Summary

The Czech Republic and Slovakia located in the middle region of the Danube, used to be a single nation:Czechoslovakia until 1993. Both countries shared the same language, lifestyle and habits, which still remain very much alike.

In the days of the socialistic regime, various restrictions were put on religious beliefs. It is most likely to be assumed that many people renounced their faith.

According to a survey we conducted across the two countries in search of wayside gods and goddesses, however, there are as many statues as those found in Catholic countries : 370 of them altogether. The statues are all large-sized, commemorating people's deep respect for divinity through the ages.